

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

なまへのゆらい、というタイトルで作文を書く宿題があった。たしか、十歳か、十一歳のころだ。家に帰って、私は母に自分の名前の由来を訊いた。

あなたが生まれたのは春だったから、春子なのだと、じつにそっけなく母は答え、それまであんまり好きじゃなかった自分の名前が、ますますきらいになった。

地味だし、どことなく年寄りじみている。はるこ、と聞いても読んでも、自分がありふれた子どものような気分になった。ありふれた、退屈な未来が待ち受けているような気がした。春だから春子、というそのシンプルな理由も、ますますもって、退屈さに拍車をかけた。

今みたいに耳新しい名前はほとんどない時代で、クラスメイトにも、地味な名前の子どもは多かった。ヨシエ、ミツコ、ノリコ、ヒサエ。それでも何人か、私には華やかに見える名前の子もいた。エリカ、リリコ、ルナ、ナツミ。あのとき、自分がどんな作文を書いたのだったか、よく思い出せない。覚えているのは、ヒサエという、私と変わらぬ深い名前の子の作文だった。

比佐江のヒは、したしむ、という意味があります。ヒサエのサは、たすける、という意味があります。ヒサエのエは、長く、おおきな川という意味があります。おとうさんとおかあさんは話し合って、Xと流れる川のように、人を助け、支え、また人に親しまれる人間に育つてもらいたいと、このなまえにきめたそうです。

読み上げられる作文に、度肝を抜かれた。そんな考え抜かれた名前だったなんて。

驚いたのはヒロユキの作文だった。父と母は新婚旅行でハワイにいった、ハワイの海を見て、いつか子どもがうまれたら海を意味する洋という字をつかおうと決めたいた。ハワイみたいに美しくて広い海を進んで行けるような子になるようにと願ってつけた、それが洋行というぼくの名です、というのが彼の作文だった。スカートめくりがほとんど趣味になってきているいたずら坊主の名前に、そんな口マンチックな意味があったなんてと、さらにショックを受けた。

それにくらべて私はどうだ。春だから春子。なんにも考えていないことがばれれば、頭の悪そうな名前。黒い犬にクロと名づけるのと、たいして変わらないじゃないか。

B
春子なんて名前は捨ててしまおうと、そのとき決心した。そうしてこつそり、ノートの裏に新しい名前を書いてみた。

春葉。春海。春香。春枝。

Y

した。春の海、と

いう文字が気に入って、友達に私は言ったものだった。今日から私は春海になります。お手紙をくれるときは、あてなにちゃんと春の海と書いてねと。

しかし私は春子だった。どうしたって春子だった。春子のまま思春期を迎え、春子のまま大人になった。地味で、シンプルで、退屈な大人になった。

結婚したのは三十一歳のときだ。

(中略)

夫は龍二のようでも大地のようでもなかった。へらへらしているようで、その笑しっかりしているようで、でもやっぱり頼りないところもあって、実際、どんな人なのか、交際をはじめてもなかなかわからなかった。夫も私に負けず劣らず平凡な名前で、ノリオという。名前の由来を知っているかと、交際をはじめてから訊いたことがある。

夫の父はノリユキで、父の父はノリシゲ、つまり夫の家

は先祖代々、男の子に「典」の字を使うらしかった。私と同じくらいかんたんな命名に、笑ってしまった。この人と結婚するかもしれないと思ったのは、あのときだったような気がする。釣り合いがとれているような気がしたのだ。名前の、というより、名前があらわしているであろう私たちの平凡さの。

都心に出るのに電車で三十分かかる町に、私たちは暮らしている。平日はともに満員電車に乗って会社へいき、双方が家に帰り着くのがだいたい八時、夕食をとって十二時には眠る。週末はたいてい、近所に買いものに行くか、やっぱり近所の公園をぶらつくか、あとは家でなんにもせずに過ごすことが多い。

私たちのあいだに第三者が介入してくる気配はない。夫が浮気をしている様子はないし、私もまた、夫以外のだれかと親しくなりたいと思うこともない。私たちはただ二人で、日々を暮らしている。

そうしていて気づいたことがある。私は未だ夫がどんな人なのか本当には知らないけれど(そしてたぶん、夫も私がどんな人か本当には知らないに違いないけれど)、私たちは二人とも、面倒くさがりなのだ。ほかに恋人を作っ

たり細工をしたりということは性に合わないのだ。私たち二人の生活を結びつけているものがあるとするとしたら、それは愛より面倒くささであるに違いない。しかしそれはちつともかなしいことではなくて、どちらかというと安心するようなことだった。龍二との恋愛も大地との恋愛も、私には、サイズがちいさすぎたり大きすぎたりする靴みただったから。

大いなる Z、大いなる退屈。

晴れた日曜、洗濯物を干しながら、そんな言葉を思いついておかしくなる。

まったく私たちの暮らしは、大いなる Z、大いなる退屈で成り立っている。

名は体をあらわすと言うけれど、ほんとうだ、と感心する。もし私が春海という名前だったら、何かもつと違う日々を送っていたような気がする。名前なんて単なる記号のようなもののなのに、その名前の響きが、所有者の人生を導いている気がすることもある。

結婚して一年目に赤ん坊ができた。これまたじつに平凡な時期である。今、五カ月で、私のおなかも少しずつ大きくなってきた。夜、ベッドのなかで眠りを待ちながら、私

と夫は子どもの名前についてあれこれ考えをめぐらせる。

私は子どものころ、自分の平凡な名前がきらいだったから、少しでも華やかさのある名前にしたいと思う。しかし夫は、平凡な自分に、もし闘也とか亜久亜とか賀是留とか希沙羅とかいう名前がついていたら、名前負けしてそれこそ恥ずかしいと言い、太郎とか花子でいいんじゃないかと極論を言う。夫の言うこともわかるが、しかし太郎、花子じゃあんまりではないか。

私たちは毎晩、名前の本をばらばらめくっては、ああでもない、こうでもない、と眠たくなるまで話し合う。喧嘩になることもある。ふたりきりのときは、喧嘩すら面倒でしなかったというのに。

妊婦が腹にまく帯といっしょに、古めかしい名前辞典が送られてきたのは、妊娠六カ月目にさしかかるころだった。送り主は母だった。

表紙の黄ばんだ名前辞典は、開くとページがばらばらになるほど古いもので、今の名前辞典とは違い、出ている名前も、良子とか由美子とか、無難なものばかりだ。めくっているうち、あることに気がついた。春、のついている名前に、鉛筆書きのまる印や三角がついている。春枝、春

乃、春樹、春夫、春繁、春美。そうして春子と印刷された文字に、強い筆跡で、何度も何度もまるがしてある。

私は想像した。若き父と母が、今の私と夫のように、この本をのぞきこみ、ああでもない、こうでもない、まる印や三角をつけあっているところを。春に生まれることだけは決まっていたんだらう。男か女かわからなかったんだらう。本の余白には、字画を数えたのだらう、小学生が書くような書き順が、いくつも書かれている。

春だったから春子なのよと、母はそつげなく言ったけれど、なんだ、あなただってこんなふうに悩んだんじやないの。

春子。余白に強く残る母の筆跡を、私はそつと指でなぞる。

予定日の三日前、陣痛がきた。ちようど夫は会社に出かけるところだったので、タクシーを呼んでもらった。数分後にやってきたタクシーに、夫に抱きかかえられるようにして乗りこむ。夫もいつしよに乗りこんできて、車内から会社に遅刻すると電話をしている。

「名前、結局まだ決めてないね」

腹式呼吸をしながら私は夫に言った。

桜のことなんかすっかり忘れていた。

走っても走っても桜はとぎれなかった。ときおりははらとこぼれ、薄桃色の花びらがタクシーの窓にぺたりと貼りついた。桜の花は、満開になるとなぜか動きを止めたように見える。昼間でも発光している特殊な明かりみたいに見える。タイムマシンに乗っている気分だった。子どもを産みにいくのではなく、はるか昔の見知らぬだれかに会いにいくような。

春だ、と今さら気づいたかのように思った。薄桃色の桜が頭上を覆い、その向こうに澄んだ青空があり、目線を落とせば、道ばたには黄色い葉の花が風に揺れていた。家々の庭からは、れんぎようが、パンジーが、名も知らぬ色とりどりの花が、私を見送るように顔をのぞかせている。春だった。視界のすみずみまで、春だった。

すべてがいきいきと発色し、動きだし、弾け、混ざり合っている、車窓が映す何もかも、ゴミをあさるカラスも、酒の安売り店の看板も、アスファルトにひかれた白い横断歩道も、二階の窓にひるがえる洗濯物までも、今このとき、ただしい色合いでただしい場所に配置されていると思った。

なんて美しいんだらうと、後部座席で呆けたように私は

「そんなこと、まだいいって」

「まだって、でもあと二十四時間くらいで決めないと」

「いいから、落ち着きなって」

夫は全身で貧乏揺すりをしながらうわずった声で言う。

私はちいさく笑ってしまふ。

ルームミラーの下に、運転手の身分証明書が貼りだされていた。望月久男と書いてあった。証明写真のなかで、生真面目にこちらを見ている運転手は、たしかに久男という名前が似合っていると、そんなどうでもいいようなことを思った。

タクシーは住宅街を抜け、通勤路である商店街を抜ける。たくさん男や女たちが、せわしく駅へと歩いていく。駅前のロータリーにたつ噴水が見えてくる。タクシーはロータリーへと直進し、大きく右折した。

そのとき、私は大きく息を呑んだ。

「桜」思わず声を出した。

駅前ロータリーから左右に続く道路を覆うように、桜の花が満開だった。まるでアーチである。そういえば、この通りは桜の名所だったのだ。一カ月前から産体に入っていたし、買いたのはほとんど夫にいつてもらっていたから、

思った。この道は今まで何度も通ったことがある、ひとりで、もしくは夫と二人で。それなのに、私は何を見ていたんだらう。まるで目を閉じて歩いていたみたいじゃないか。目を開いてみれば、こんなにも美しい世界が飛びこんでくるといふのに。

春子。そうか、春子。母が私を産むために急いだ道も、こんなふうになるごと春だったんだらう。ああ春だと、おなかをさすりながら母は思ったのだらう。私は世界がこんなにも色鮮やかになるときに、子どもを産むんだと、願わくば、その子どもが目を見開いてこの世界を見てくれるようにと、思ったのだらう。

おなかのぎゅうと痛み、私は夫の腕を強く握る。だいたいようぶかと夫が私をのぞきこむ。へいきへいき、と笑いながら、私はなぜか、別れた二人の恋人のことを思い出す。彼らも彼らの名前にふさわしい日々を送っているのだらうか。彼らの名前にふさわしい場所を、目を見開いて見ているのだらうか。

「運転手さん、お願い、急いで」泣きそうな声で夫が運転手に話しかけている。

もう少し待ってと、世界に出てこようとしているだれか

に向かつて私は話しかける。もう少し待つて。^Eあなたにふさわしい名前を今考えているから。あなたにしか似合わない名前をまだ考えているから。川みたいな春みたいな、光みたいな太陽みたいな、人を助けるような頼られるような、健康であるような人に好かれるような、いや、そんな意味など何ひとつなくなつていい、あなたがあなたである^{にんしき}とだれかが認識してくれる名前であるならば。

私と夫と、未だ名前のついていないだれかを乗せたタクシーは、桜のアーチの下をフルスピードで駆け抜ける。

(角田光代「名前」による)

【注】

*龍二のようでも大地のようでも——共に春子の元交際相手。

*陣痛——出産前に起こる腹部の痛み。

*ロータリー——交通整理のための円形地帯。

問一——線部A「拍車をかけた」について、ここでの意味として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 勢いを増した
- イ 悪影響^{あくえいきやう}を与えた
- ウ 重圧がかかった
- エ 限界がなくなった

問二 空欄^{くうらん} X ・ Y にあてはまることばを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

- ア うつとり
- イ がっくり
- ウ さつぱり
- エ ゆったり

問三——線部B「春子なんて名前は捨ててしまおうと、そのとき決心した」とありますが、それはなぜか。「そのとき」の状況^{じようききょう}もふくめて説明しなさい。

問四 空欄 Z に共通してあてはまるふさわしいことばを本文中から二字で書き抜きなさい。

問五 — 線部C「余白に強く残る母の筆跡を、私はそつと指でなぞる」とありますが、このときの春子はどのような気持ちか。その説明として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 自分も母親になったことの実感がわいてきて、親になる喜びを抱いている。
- イ この辞典を母が使っていたことに気づき、母との思い出を消そうとしている。
- ウ 平凡な名前に強く不満を感じていたので、母に対して申し訳ないと反省している。
- エ 若き母が実は悩んだ末に春子の名前を決定したことを知り、愛しさを覚えている。

問六 — 線部D「私はちいさく笑ってしまう」とありますが、それはなぜか。説明しなさい。

問七 春子は自分の名前について、……線部I「それまであんまり好きじゃなかった自分の名前が、ますますきらいになった」から……線部II「春子。そうか、春子」へ捉え方が変化している。捉え方が変化した理由を、七十五字以内で説明しなさい。

問八 — 線部E「あなたにふさわしい名前を今考えているから」とありますが、春子の名づけに対する思いの説明として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 川や春のように名前にふさわしい場所を連想させる言葉が入っていること。
- イ 平凡でもいいから健康で幸せに生きてくれるような言葉が入っていること。
- ウ 特別な意味がなくても他人からその人だと認められる言葉が入っていること。
- エ 華やかさを持ちながらも名前負けしないちよいどよい言葉が入っていること。

二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

なぜ人間は動物園をつくるのか、なぜ動物園の動物を見にゆくのか、その前に、そもそもなぜ人間は動物を飼いたいのか。

(中略)

人間が動物を飼うのは、人間が自然から切り離^{はな}され、おのれの無力と劣等性^{れつとうせい}に直面せざるを得ない孤立^{こりつ}した存在であるからだと思う。環境^{かんきやう}に適応する本能的行動形式を生まれつき身につけ、世界のなかに安住している動物と違って、本能がこわれてしまっている人間は、この世界のなかで何をどうしていいかわからず、つねに疎外感^{そがいかん}、不安、無力感、劣等感などに囚^{とら}われている。

1 人間は、心

の底のどこかで動物に羨望^{せんぼう}を抱^{いだ}いている。この羨望は、ポジティヴな形とネガティヴな形の正反対の二つの形に現われる。人間は、もちたいとあこがれながら自分ではもつことのできないいろいろな優れた能力や美しい性質を動物に「発見^{はっけん}」し、その動物を崇拜^{すうはい}したり、愛好したりする。ライオンの強い攻撃力^{こうげきりよく}や、馬の速い足や、天高く舞う鷹^{たか}の勇姿に人間はあこがれ、それらの優れた能力をわがものにし

もまず、劣等感、無力感、不全感^{* 補償^{ほしょう}のためである。}

動物が他の動物を飼わないのは、そのような自己不全感をもっていないからである。人間にはこの不全感があるからこそ、それを埋め合わせるものとして動物が眼に映ってきたのであり、動物を飼うという発想が生まれたのである。そのため人間は、現実^{じゆつ}に存在する動物だけでは足りなくて、竜^{りゆう}や鳳凰^{ほうおう}などの空想上の動物までつくりあげる。ギリシア・ローマ神話においても、半人半馬のケンタウロスなど、いろいろな空想動物が登場する。日本神話には八岐^{やまた}のおろちがいる。空想動物をつくりあげる人間の内的必要性は依然^{いぜん}として消え去らず、現代では、ネス湖のネッシーや、テレビや映画でおなじみのさまざまな怪獣^{かいじゆう}のたぐい²が出現させている。

(中略)

人間は、自分の美しい面や醜^{みにく}い面、実際にはもっていないがもちたいとあこがれている性質、
2 もつこ

とを恐^{おそ}れている性質を付与^{ふよ}する対象として動物を必要とする。さまざまな動物は、人間のさまざまな側面や性質を具^{*}有していると見なされる。そして人間は、それらさまざまな動物を飼育し、支配し、ときには殺すことによって、あ

たいと願^{*}う。トーテミズムに見られるように、自分たちの祖先はライオンだとか熊だとかと信じている部族がある。

彼らは、自分たちはライオンの子孫だと信じていることによって、ライオンの強さが自分たちに具^{そな}わっていると思うのだ。彼らは、先祖として、神聖な動物としてつねづねは決

してライオンを殺さないが、祭りのときには殺してその肉を食べる。ライオンの肉を食べることによって、ますます自分はライオンになるのだ。かくして彼らは不安と頼りなさから逃れる。古代ローマの皇帝たちは、たくさんのライオンや虎などを飼っていて、闘技場^{とうぎじやう}で捕虜^{ほりよ}や奴隸^{だれい}と闘わせたが、ライオンや虎は皇帝の権力の象徴^{しょうしやう}だったのであろう。たくさんのライオンや虎を飼い、自由に駆使^{くし}するということで、皇帝たちは、動物の強さがすなわち自分の強さであると感じていたのであろう。同様に、馬に乗って野を駆ける戦士は、自分の力で強く走っているかのように感じていたのであろう。ここに、人間という動物だけが他の動物を飼う第一の理由があると思われる。人間が動物を飼うのは、自己の延長としてであり、弱い、無力な、不完全な自己の欠落を埋め合わせと支えとしてである。それは、すでに述べたように、現実的有用性のためではなく、何より

れこれの性質をわがものにしたたり、除去したりしようとしているのである。^① いじめているのかかわいがっているのかわからないような犬の飼い方をする飼主^②がいる。めったやたらに殴^{なぐ}りつけるかと思うと、頼^{たの}ずりしてなでてやつたりする。犬には分不相応なご馳走^{ちしゆう}をつくって犬に見せて長時間お預けを喰^{くら}わせ、欲しがって卑屈^{ひくつ}にわめく犬の姿を見て楽しんでる。彼は、意識しているにせよしていないにせよ、^③ その犬の姿に、報酬欲^{ほうしゆうよく}しさに卑屈に顧客に頭を下げて回っている自分の姿を見ているのかもしれない。そして、そういう自分自身に対する憐憫^{れんぴん}と嫌悪^{けんお}を犬にぶつけているのかもしれない。猫だけはかわいがる冷酷無情な男^④がいる。人間に対しては警戒^{けいけい}と不信を決して忘れない彼は、彼に何の警戒も抱かず、すり寄ってくる猫に、現実にはなれないのだがなりたいたころの自分を見ているのかもしれない。^⑤

動物たちは人間の別の姿である。いや
3 、そう

でなければならぬと言った方がよいであろう。だからこそ、人間は、動物にあれこれの人間的性質を付与し、それだけでは足りず、さらに動物を人間化しようとして、動物にいろいろ芸を仕込^{しこ}んだりするのである。ライオンに火の

輪をくぐらせたり、猿に電車を運転させたり、犬に二本足で歩かせたり、チンパンジーを自転車に乗らせたりして、どうして人間はおもしろいのであろうか。どうして金まで払ってサーカスの動物の曲芸を見にゆくのであろうか。動物が、本来はやらない、人間しかやらないことを見ることによって、人間は、動物が人間化し、人間の世界に所属したことを認識して喜ぶのである。

動物が人間の世界に所属したことを確認することが、どうして人間は嬉しいのであろうか。この背後には、人間の自然からの疎外感があると思う。さきに述べたように、人間は自然から切り離された存在である。そして、自然の世界とは別な人工的な世界をつくっている。この人工的な世界のなかで、人間は疎外感と孤立感に責めさいなまれている。それから逃れるため、人間は、自然のなかに安住している動物たちを自然からあえて切り離し、いろいろな人間的性質を付与したり、飼育したり、芸を仕込んだりして、人間の世界に引き入れようとする。そして、人間の世界が人間だけ孤立した世界ではないことを確認しようとする。

(中略)

このようにして人間は、人間と動物たちをつなごう、い

や正確に言えば、動物たちを人間を主人とする人工的世界に引き入れようとしてきたわけだが、その努力がもつとも露骨な形で表れているのが、動物園である。

(岸田秀「なぜヒトは動物園をつくったか」による)

【注】

- *羨望——うらやましく思うこと。
- *崇拜——尊敬し、あがめること。
- *トーテムズム——人間集団がある特定の動植物と特別な関係をもつと考える信仰や制度。
- *不全感——状態が不完全であるという考え。
- *補償——ものごとの欠けている部分を補い修正すること。
- *付与——与えること。
- *具有——性質や条件などをそなえもつこと。
- *卑屈——自分をいやしめる、低く見ること。
- *憐憫——あわれむこと。

問一——線部A「人間が自然から切り離され」とありますが、自然から切り離された人間とはどのようなものか。解答欄に合
うように、同じ段落の中から十五字以内で書き抜きなさい。

問二

1

3

にあてはまることを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア あるいは イ したがって ウ むしろ

問三——線部B「神聖な動物としてつねづねは決してライオンを殺さないが、祭りのときには殺してその肉を食べる」とありますが、なぜ神聖な動物であるライオンの肉を食べるのか。その理由として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 肉を食べることで、神聖なライオンに近づいて永遠の命を得ることができると思うから。
- イ 肉を食べることで、ライオンのもつ優れた能力を自分の体内に取り入れたいと思うから。
- ウ 肉を食べることで、攻撃力のあるライオンをねじ伏せ優位に立つ強さを示そうと思うから。
- エ 肉を食べることで、同じ血肉を分けた兄弟となってライオンとの信頼関係を築こうと思うから。

問四 ―線部C「人間という動物だけが他の動物を飼う第一の理由があると思われる」とありますが、なぜ動物は他の動物を飼わないのか。その説明として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 動物には人間のような自己を見つめ、足りないところに気づく知的能力がないから。
- イ 動物には人間のような優れているという考えがなく、不安とともに生きているから。
- ウ 動物は人間のように他の動物と自分とを比較^{ひかく}して、自分を不完全だと思わないから。
- エ 動物は人間のように他の動物にあこがれて成長していこうとする向上心がないから。

問五 ―線部「この羨望は、ポジティブな形とネガティブな形の正反対の二つの形に現われる」とありますが、ポジティブな羨望とネガティブな羨望の例として最もふさわしいものを、文中の……線部①～⑤から選び、それぞれ記号で答えなさい。

問六 ―線部D「人間は、動物が人間化し、人間の世界に所属したことを認識して喜ぶのである」について、次の問いに答えなさい。

- (1) 「動物が人間化する」とはどういうことか、答えなさい。
- (2) なぜ「動物が人間化し、人間の世界に所属したことを認識して喜ぶ」のか、説明しなさい。

三

次の①～⑤の――線部のカタカナを漢字にしなさい。

- ① 作物が台風のソ^ンガイを受けた。
- ② クラシックギタ^ーをエンソウする。
- ③ 定期的^にツクエの上を片付ける。
- ④ 友人のヒミツを守ると約束する。
- ⑤ 紅花^{を使}って布をソめる。

二〇二一年度 国語解答用紙(第一回)

受 験 番 号

点 評	
一	
二	
三	
総 点	

三

④	①
⑤	②
める	
	③

問六

(2)	(1)

	問五	
	ポジティブ	
	ネガティブ	

[illegible]

問八

[illegible]

問六

問四

問五

問

問一

問二

X
Y